



栗原 ^{さき}彩希 さん

●飛騨小学校6年

私の夢

私の将来の夢は、看護師になることです。

母親が看護師なので、元からあこがれていた職業でしたが、あまり看護師になりたいとは思っていませんでした。ですが、6年前に起きた東日本大震災のニュースを見て、私は「もっと人の役に立ちたい」と思うようになりました。

病気で困っている方や被災された方を自分の力で助けて、その困っている方を幸せにしたいです。この夢を叶えるために、これからもっと努力していきたいと思います。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からの メッセーじ

3月に入り、花の便りが春の訪れを運んできました。梅林公園や朝日森天満宮の梅の花や、柿平のセツブンソウなどが見頃を迎え、春の息吹を感じさせてくれます。

今月16日からは、町谷町の「万葉自然公園カタクリの里」で、スプリングフラワーフェスティバル「かたくりの花まつり」が開催されます。市の花であるカタクリの群生をぜひ見に来てください。

さて、1月29日には栃木県郡市町対抗駅伝が行われました。Aチームは昨年の総合初優勝に続く連覇を目指して力走を見せられました。Aチーム一歩及ばず3位、Bチームは8位入賞という結果でした。連覇はできませんでしたが、A・Bそれぞれが表彰され、本市全体としての底上げができていますと感じました。来年の活躍を期待しております。

今年度から本市では、東京オリンピックピックや栃木国体を見据え、競技力の向上やスポーツ振興を図ることを目的とし、ジュニアスポーツ賞を定め、全国大会などで活躍した各種目72人の小・中学生を表彰しました。小・中学生の皆さんには、これを励みに、そして目標に頑張ってもらいたいと思います。

先月12日には、山形町会で防災訓練が行われ、約240名の方々が訓練に参加しました。東日本大震災から6年がたちますが、市民の皆さんの防災意識は継続して高いままであると大変心強く感じました。改めて、日頃の備えをお願いします。

今月は年度の締めくくりであり、卒業式のシーズンです。9日には中学校、17日には小学校の卒業式が行われます。卒業される皆さんの新たな門出に際し、更なる成長と活躍を期待いたします。

日々暖かくなりますが、市民の皆さんには風邪などひかないようご自愛ください。

岡部正英



今回の表紙 「梅の花」 梅林公園 平成28年3月4日撮影

唐沢山の東のすそ野、富士町にある梅林公園では、白梅140本、紅梅80本のほか、桜など多くの花木が植栽されており、春の梅の開花時期には、遠く県外からも大勢の花見客が訪れています。梅の香りが広がる時期、ぜひ訪れてみてください。

キラリ★ 話題の「ひと」

永島 イセ子 さん (田沼町)

○プロフィール
38年間の幼稚園教諭を退職後、9年間の民生委員を務めたのち、介護施設などでの傾聴のボランティア活動を行う。



傾聴ボランティアとして活躍

今回ご紹介する永島さんは幼稚園にお勤めでしたが、義母の介護などの関係で早めに退職されたそうです。家族の介護を8年ほどで終えた後、民生委員を三期9年務め、現在は「傾聴ボランティア」として活動中です。

永島さんが所属する傾聴ボランティアの会はメンバー30名ほどで、介護施設でデイサービスに来られた利用者の方を対象に活動しています。時間は午前中の10時から11時半頃までとのことでした。

実は私は「傾聴」と聞いても、どんなふうにするのかイメージが湧きませんでした。そこでさっそく、永島さんたちが活動しているところを、特別に見せてもらいました。

永島さんたちは施設に着き、職員の方に挨拶すると、入所者の皆さんが3人のグループで話しているところに行き、そこに入って話に参加し、話を聞きながら、相槌を打ったり話かけたりしていました。

利用者の方がお風呂の順番待ちをする時間や、リハビリ訓練の合間などに話しかけるとのこと。お風呂を嫌がる方や訓練に消極的な方には、さり気な

く励ましたり、お風呂に誘ったりしていました。また、認知症の方も同じ話を何度もしたり、男性の利用者の方が昔の仕事の話を繰り返す時なども自然に耳を傾け、時には驚いたり、褒め言葉を交えたり、いろいろな言葉を返していました。

世間話をしているようでありながら施設スタッフと利用者の動きの流れに気配りも忘れないところなど、その柔軟な姿勢に、人生のキャリア・懐の深さを感じました。お仕事を辞められた後も、地域社会の活動に積極的に参加するその姿には、見習うべきところがたくさんあると思いました。

(市民記者 福田 満)



施設利用者の皆さんの話しに
耳を傾ける永島さん



焦げつくことを コビツクという

電気炊飯器(電気釜)が普及する前は、ほとんどの家庭で、かまどに釜(かま)をかけ、下から火を燃やしてご飯を炊(た)いていました(当時は炊くをニルともいいました)。かまどの火の燃え具合を見ながら、「そろそろ弱火にしないと、コビツイチャーカンね」などといったものです。火の調節をあやまると、飯粒(めしつぶ)が焦げて釜底にくっついて、簡単に取り除くことができなくなります。このような状態になることを、共通語で「焦げつく」といい、方言ではコビツクとかコビリツクなどといいました。

「薪(まき)をツツクベルンナ(くべるのは)いいけど、火加減や時間を見てなかつたンダンベー。飯(めし)粒が釜の底にゼンテ(すつかり) コビツイチャッタガネー。トシヨリ(年寄り) ジャー、歯がワリーからかたくって食ベランナカンベー(食べられないでしょう)」

「焦げつく」といわず、かつてはコビツク(コビリツク)と言っていました。文明化すると、薪を使って煮炊きすることがなくなり、コビツク(コビリツク)を使用する人が、だんだん少なくなってしまう。共通語のこびつく(こびりつく)は「嫌(いや)なことが頭にこびりついて」のように、物や考えなどが付着して離れない状態をいい、「焦げつく」とは関係のない言葉でした。ところが、くっついて離れないということが共通することから、焦げつくことをコビツク・コビリツクというようになったのです。(市民記者 森下喜一)

